石川県立美術館だより

平成14年6月1日発行　第224号

第33回 日展 金沢展

会 期　5月25日(土)～6月16日(日)会期中無休

静寂　武腰敏昭　内閣総理大臣賞

目 次

第33回日展金沢展 ……2
甲冑と陣羽織、江戸時代の絵画Ⅰ ……3
常設展示室 主な展示作品 ……4
図書閲覧室NOW ……4
県美Q＆A、美術館の本、各地の展覧会 ……5
美術館小史・余話（23） ……5
講演会記録、企画展示室、次回の展覧会 ……6
企画展TOPIC、六月の行事案内 ……7
所蔵品紹介、ミュージアムショップ通信 ……8

ホームページアドレス　http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/

第3～9展示室

第33回日展金沢展

5月25日(土)～6月16日(日)会期中無休

主催／社団法人日展・北國新聞社・富山新聞社・テレビ金沢
石川県・石川県教育委員会・金沢市・金沢市教育委員会

羅・in　干田　浩　特選

風岬　渡部　浩　特選

日展は長い伝統を持ち、所属作家層の厚さと優れた作品で知られ、日本画・洋画・彫刻・工芸美術・書の日本美術の各分野を網羅し、わが国最大・最高水準の総合美術展として親しまれています。

日展は明治四十年の文部省第一回美術展として発足以来、九十余年の歴史を持ち、この間、その時々の改革を重ねながら、常にわが国美術界の中核として日本美術文化の発展に貢献してきました。今回は、昭和四十四年の改組から数えて三十三回目の展覧会となります。

金沢展は、二年ぶり十七回目の開催です。本展の力作の中から、日本芸術院会員、日展理事、評議員、会員などの秀作と、内閣総理大臣賞、日展会員賞、特選などの受賞作品約三百点を選抜して基本作品とし、これに石川県関係の入選作品を加えて、総計約四百五十点を一堂のもとに展示します。

全国的に見て石川県は、美術文化にすぐれた土壌を持ち、作家層も厚く、今回は新入選九人を含め百十六人が入選しました。なお石川県関係の受賞作品は、工芸美術では武腰敏昭氏「静寂」が内閣総理大臣賞、干田浩氏「羅・in」と西塚龍氏「星夜の道化師」がそれぞれ特選を受賞。日本画では石川義氏「経堂への道」が文部科学大臣賞を受賞。また彫刻でも渡部浩氏「風岬」が特選を受賞しました。

本展の開催によって豊かな芸術作品に接する機会を提供し、芸術文化の向上、情操教育の振興に役立てば幸いと念願しています。

◇主な出品作家（五十音順・敬称略）

日本画
石川　義　奥田　元宋　白鳥　映雪
鈴木　竹柏　高山　辰雄　濱田　台児

洋　画
円地　信二　奥田　憲三　庄司　栄吉
寺島　龍一　平松　譲　森田　茂

彫　刻
石田　康夫　北村　治禧　得能　節朗
富永　直樹　野々村一男　渡部　浩

工芸美術
青木　龍山　井波　唯志　大樋長左衛門（年朗）
奥田小由女　武腰　敏昭　高橋　節郎
帖佐　美行　西塚　龍　蓮田修吾郎
干田　浩　三谷　吾一

書
小林　斗盦　杉岡　華邨　田島　方外
村上　三島　横西　霞亭

◆作品解説日程（六月分のみ掲載。変更されることもあります。）

月日	時間			
6月4日(火)	10:30～12:00	洋画 円地　信二		
	13:00～14:30	彫刻 石田　康夫		
	14:30～16:00	工芸美術 北出不二雄		
6月6日(木)		書 横西　霞亭	日本画 百々　俊雅	洋画 松本　昇
6月10日(月)		彫刻 山瀬　晋吾	工芸美術 角野　岩次	書 田島　方外
6月12日(水)	10:00～11:00	日本画 平木　孝志		
	11:00～12:00	洋画 大滝由季生		
	13:00～14:00	彫刻 野畠耕次介		
	14:00～15:00	工芸美術 三谷　吾一	書 三藤　観映	
	15:00～16:00			

◆観覧料

個人	一般・大学生	1,000円
	中・高生	700円
	小学生	400円
団体（20名以上）	一般・大学生	800円
	中・高生	500円
	小学生	300円

※石川県立美術館友の会会員は、正面受付で会員証を提示されると、団体料金になります。

経堂への道　石川　義　文部科学大臣賞

飴釉「不識」飾壺　大樋長左衛門（年朗）（日展常務理事）

星夜の道化師　西塚　龍　特選

常設展示室(前田育徳会展示室)
特　集
NHK大河ドラマ「利家とまつ」放映協賛

甲冑と陣羽織
5月23日(木)～6月16日(日)

天正十一年（一五八三）、藩祖前田利家が金沢へ入城したその時期に合わせて、前田家歴代藩主所用の甲冑・陣羽織及び鞍・鐙などを展示します。

人類が生まれて争いが始まると、身を守るために甲冑が必要となりました。当初は簡素なものでしたが、時代の経過や戦いの変化に応じて次第に改良が加えられました。

応仁の乱（一四六七～七七）以後、室町幕府の権威が衰え、各地に武将が割拠して争い、戦闘が絶えない戦国時代となりました。この間の戦闘は、槍の普及さらには天文十二年（一五四三）の鉄砲伝来を契機として、密集隊形による徒歩集団戦へと変化し、機敏な動きをするためにより軽い甲冑が大量に求められ、また、攻撃具が多様化、強力化したのにともない、防具である甲冑の変化もうながされ、より頑丈なものが求められました。

このような時代背景から、これまで作られてきた甲冑の様々な要素を組み合わせて、総合的に構成され生まれたのが当世具足です。具足とは、装具の完備した甲冑という意味であり、大鎧、胴丸、腹巻などがそれだけで成り立っていたのに対して、当世具足は兜・面具・胴・袖と籠手・臑当・佩楯の七具などをすべて皆具している点が特徴です。

今回は、修復が完了しました三代利常の甲冑をはじめ二十二点を展示します。

日本の絵画史を概観すると、室町時代後期から江戸時代前期、西暦で言えば十五世紀後半から十八世紀前半にかけて注目すべき展開が認められます。今話題の雪舟の一連の作品に見られるように、この時代の絵画は、中国の伝統との鮮烈な出会いによって日本的美意識が呼び覚まされてゆくという、明確な方向性を持っています。それは村田珠光が「心の文」で侘茶について言及した〝和漢の境を紛らかすこと肝要〟に通じるものであり、この時代の文化全般に見られる特質と言うことができます。

当館では、かつて開館十周年記念特別展として「日本美の心―絵画にみる装飾性と抒情性、十六、十七世紀を中心に―」という展覧会を開催して、上記の展開を再認識しました（なお、同展の図録は定価二千円で当館のミュージアムショップにて販売しています）。

今回の特集は、展示点数は六点と少ないですが、この特別展の「続編」と言えるものです。織田信長や豊臣秀吉が天下統一を目指した十六世紀後半は、城郭建築と相まって、屏風や襖絵など大画面の絵画が多様な展開を遂げ、様々な流派が力量を競い合いました。江戸時代に入り、狩野派が幕府の御用絵師になると諸流派は再編され、代わって町絵師が活躍しました。

こうした状況は従来からの漢画系、やまと絵系という流派固有の様式を緩やかにし、この両者を融合する新たな様式を生みました。この根底にも室町時代以来の大きな潮流を認めることができますが、大名や武家とともに、町人が絵画の有力な需要層となってきたことも大きな意味を持っています。

そこで今回は、狩野派を中心とした江戸時代前期の漢画系の画家にスポットを当て、伝統の踏襲と時代の趣味への対応という観点から作品を構成しました。江戸時代の狩野派に対しては、とかく伝統の墨守というイメージがありますが、今回の展示を通して狩野派の「柔軟性」も再認識したいと思います。

常設展示室(第2展示室)
特　集
江戸時代の絵画Ⅰ
5月23日(木)～6月16日(日)

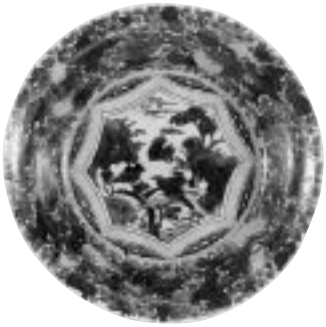
帰去来図　狩野友益

常設展示室

主な展示作品

5月23日(木)～6月16日(日)

◉＝国宝　◎＝重要文化財　○＝重要美術品
□＝石川県指定文化財



□色絵百花散双鳥図平鉢　古九谷

前田育徳会展示室

特集　甲冑と陣羽織

六十二間星兜　信貞
障子文金銀象嵌鐙
黒塗六十二間甲冑　三代利常所用
菖蒲革包頭巾甲冑　十一代治脩（はるなが）所用
蕨手文陣羽織　五代綱紀（つなのり）所用
鱗形に松皮菱文陣羽織　五代綱紀所用
日の出に立波文陣羽織　六代吉徳（よしのり）所用
牡丹獅子文陣羽織　七代宗辰（むねとき）所用

第1展示室

◉色絵雉香炉　野々村仁清
◎色絵雌雉香炉　野々村仁清

第2展示室（古美術）

古九谷

○□色絵布袋図平鉢
□色絵百花散双鳥図平鉢
□色絵鵜草花図平鉢

特集　江戸時代の絵画Ⅰ

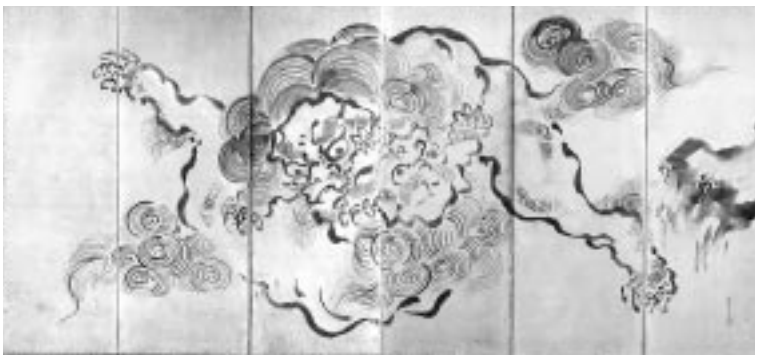
義経図　狩野常信
源氏物語図
御所車図
琴棋書画図
帰去来図・剡渓訪戴図　狩野友益
唐獅子図　狩野伯圓

第3～6展示室（近現代美術）

現在第33回日展金沢展会場として使用されておりますので、六月二十日（木）より再開いたします。

◆観覧料

個人	一般	350円
	大学生	280円
	高校生以下は	無料
団体（20名以上）	一般	280円
	大学生	220円
	高校生以下は	無料



唐獅子図　狩野伯圓

□色絵鵜草花図平鉢　古九谷

図書閲覧室NOW

新着図書紹介

本年、三月から五月にかけて、京都国立博物館と東京国立博物館で、大規模な「雪舟」展が開催されました。今回は、この展覧会図録をご紹介したいと思います。

本展は、雪舟の没後五百年（ただし、没年は文亀二＝一五〇二年説と永正三＝一五〇六年説があります）にちなんで、企画されたものです。雪舟の展覧会は、昭和三十一年に東京国立博物館で没後四百五十年（永正三年没説にもとづく）を記念して、大きな展覧会が開かれていますが、それ以来の大回顧展といえます。内容は、「山水長巻」「秋冬山水図」「破墨山水図」「天橋立図」「山水図」といった国宝に指定されている傑作をはじめ、雪舟の代表作を網羅するものでした。また、影響を受けたり、ライバルであった同時代の画人や、雪舟の作品との関連が注目される中国絵画など、幅広い視点で構成されています。ちなみに、当館からも雪舟の弟子であった秋月等観の「西湖図」（重要文化財）が出陳されました。

図録は、A4判、オールカラーで約三百四十頁の豪華なもので、巻頭には著名な研究者の論文、それに続いて見応えのある作品図版、後半部分には詳細な作品解説、関連資料が付されており、研究者のみならず、一般愛好家にも必見のものといえましょう。なお、昭和三十一年の雪舟展の図録は、B5判、モノクロで約六十頁のいたって簡素なものでした（ただ、別に豪華図録が作成されましたが）。これと比較すると、時代の趨勢とはいえ、近年、いかに展覧会図録が大型化され、技術の進展によって鮮明な図版を豊富に掲載するようになってきたかがわかります。

※開室時間は午前九時三十分～午後四時三十分。貸出し、コピーサービスは行っておりません。

県美 Q&A

図書閲覧室の利用の仕方は？

Q **図書閲覧室は誰でも利用できるのですか？何か特別な申し込み手続きがいりますか？**

A 何の手続きもいりません。どなたでもご自由にご利用下さい。

多くの友の会会員の方々は、入会手続きのために年に一度はここを訪れて下さいますね。でも実際に利用なさっている方はというと、「少ない！」の一言です。その理由として「美術館は展覧会を見に行く所だし、本なら図書館へ行けばいい」「貸出し・コピーサービスがない」というようなことがあるでしょう。「ん、そんなのあったの？」という人もまだまだ多そうです…。

さて、ここには全国各地の美術館展覧会図録をはじめ、公共図書館ではあまり目にすることの出来ないような美術関係図書が、数多く（二万冊以上！）所蔵されています。閲覧サービスだけの部屋ですが、まさに知る人ぞ知る美術書の穴場ですね。ちょっと不便なのは小さな部屋なので開架できる本がとても少なく、大部分は書庫内にあること。でも探すことなら心配御無用。館内四ヶ所（そのうちの一つは閲覧室内）に設置された、デジタルミュージアムの検索システムを使えばとても簡単。室内には係員も必ずいますので、何でもお気軽にご相談下さい。美術館がお好きな方なら、ここも利用しない手はありません。

――（美術館の本）――

	税込定価（円）
石川県立美術館所蔵品図録	三、五〇〇
前田育徳会展示室　開館記念名宝展	一、五〇〇
前田利為と尊経閣文庫	二、〇〇〇
工芸作品と図案　―創造への思考―	二、〇〇〇
前田利家没後400年　利家が生きた　桃山時代の美術	二、五〇〇
没後25年　写実と幻想の巨匠　宮本三郎	二、三〇〇
初公開　欧州随一の日本美術コレクション　ランゲン夫妻の眼 ―石川県立美術館所蔵―	二、〇〇〇
彫刻家　吉田三郎	二、〇〇〇
花の様式　ナンシー派展	二、〇〇〇
花と緑の名品展　―自然との対話―	二、〇〇〇
最新刊	
日本芸術院会員　大樋長左衛門の世界	二、二〇〇

※ミュージアムショップで販売中!!

郵送ご希望の方は当館へ電話でお問い合わせ下さい。

（☎〇七六―二三一―七五八〇）

各地の展覧会　六月

※開催日程、休館日、内容等は直接各館へお問い合わせ下さい。

2002FIFAワールドカップ開催記念　韓国の名宝　6／11～7／28
東京国立博物館（東京都台東区・〇三―三八二二―一一一一）

よろこびの歌を唄いたい！宮崎進展　7／7まで
横浜美術館（横浜市西区・〇四五―二二一―〇二〇〇）

モネ展　睡蓮の世界　6／16まで
名古屋市美術館（名古屋市中区・〇五二―二二二―〇〇〇二）

イタリア抽象絵画の巨匠　アフロ　ブッリ　フォンタナ　6／6～7／21
国立国際美術館（吹田市・〇六―六八七六―二四八一）

クラーク財団日本美術コレクション　アメリカから来た日本　5／28～6／30
大阪市立美術館（大阪市天王寺区・〇六―六七七一―四八七四）

大仏開眼1250年　東大寺のすべて　7／7まで
奈良国立博物館（奈良市・〇七四二―二二―七七七一）

松方・大原・山村コレクションなどでたどる　美術館の夢　6／23まで
兵庫県立美術館（神戸市中央区・〇七八―二六二―〇九〇一）

美術館小史・余話　23

嶋崎　丞（すすむ）　当館館長

旧館開館十周年の歳を迎えて（一）

旧石川県美術館は、昭和三十四年に開館しているので、昭和四十四年は開館十周年の歳に当たった。どこの美術館や博物館でも、開館十周年ということになると節目の歳なので、必ず記念的な展観や行事が実施されるのが通例である。当館でも昭和四十二年に入ってから、どのような展観を開催すべきか検討されはじめたが、折しも読売新聞社から、フランスの画家ロートレックの展示を開催しないかという申し入れを受けた。日本での開催は確か三ヶ所。東京と京都はそれぞれの国立近代美術館で、そして地方では当館一館のみということである。しかしこのロートレック展の開催は、昭和四十三年度の実施事業であって、当館の十周年事業に当てるにはいささか無理があった。そこで最後の会場を引き受ければ、年度は一年先でも、開催する年月は昭和四十四年三月であり、開館十周年といえないこともないという、今考えてみれば実に乱暴な理屈をつけて開催を引き受けることにした。

ところが、日本での最初の会場である京都国立近代美術館で、開催期間中「マルセルの肖像」という作品が盗難に遭う事件が発生した。当館での開催も無理して決定した手前もあり、きっと厳重な管理体制が要求されるであろうから中止すべきだとの意見もあったが、当館としては初めての海外からの展観だということで、予定通り実施に踏み切った。展示室での監視体制は、初めて今でいうガードマンを入れ、夜は近くの交番から警察官の見回りをお願いし、どうにか展観は無事終了したのである。盗難事件が話題を巻き起こしたことなども手伝って、北陸では三月という悪い時期での開催にもかかわらず、約四万人もの入場者を記録し盛会であった。

講演会記録

親父と私

講師　高光一生氏（陶芸家）

「没後十五年 高光一也展」開催中の一月十三日、高光一也氏のご子息で陶芸家、高光一生氏の講演会が開かれました。前半は、僧侶としての父一也氏の姿を知っていただくために、昭和四十七年七月、小松市の本覚寺での法話をお聞きいただき、後半は一生氏が父であり、先輩作家であり、また仏教者であった一也氏に対する思いを、一也氏がヨーロッパ取材旅行の際に撮影したスライドをバックに語るという構成でした。

画家として高光氏をよく知る方でも、氏の法話を聞いたことがある方は少ないと思います。約四十分間テープでお聞きいただいたのですが、卑近な話題をたとえに、まるで漫談を聞いているようで、超満員の会場は笑いが絶えませんでした。金沢弁丸出しのざっくばらんな口調は、厳格な画家としての姿しか知らぬ我々にとっては驚きで、こうした姿を知っているのといないのとでは、作品に対する見方考え方も違ったものになっていたことでしょう。仏教者としての高光一也氏の深さを少しうかがえた思いがいたしました。

講演で一生氏は、陶芸家である自分の立場との比較から、作家にとって制作環境の整備がいかに重要なことであるか、そして父一也氏がそうした環境を作ってくれていたことに対する感謝の思いを述べられていました。父親を一番知らないのは、実は身近にいる子供、つまり自分であったが、最近徐々に理解できるようになってきたとの言葉が印象的でした。

（今回の講演会では、一也氏の法話テープをお聴きいただくことに重きが置かれていましたので、その概要を報告いたしました。）

企画展示室

第6回石川県日本画協会展

六月二十二日(土)～二十六日(水)
（第8・9展示室）

石川県日本画協会に所属し、公募展の枠組みを越えて活躍している県内在住の日本画の作家による展覧会です。それぞれ会員の一年間の取組の発表として、あるいは、今後の制作に向けての実験的な取組として、それぞれが研究・模索を目的とした研鑽の場となっています。ベテランから若手まで広く県内日本画家の作品を知る上で、絶好の機会だと思います。

入場無料

〈連絡先〉能美郡辰口町松が岡四―三〇
石川県日本画協会事務局長　上口文治
☎〇七六―五一―六八一五

石川の書展

六月二十九日(土)～七月三日(水)
（第8・9展示室）

石川県内の代表的な書作家の新作約二百展を展示します。石川県書美術振興会は会派・社中を超えた書作家の団体であり、日本の代表的な書作家の作品を展示する「日本の書展」と、県内作家の新作を展示する「石川の書展」を一年おきに開催しております。本展は県内書壇の現状を知る上で格好の展覧会です。

入場料
一般五〇〇円　高大生三〇〇円　小中生一〇〇円
（団体料金は各五〇円引）
※当館友の会会員は、会員証提示により団体料金。

〈連絡先〉金沢市香林坊二―五―一
北國新聞社事業局　石川県書美術振興会
☎〇七六―二六〇―三五八一

第43回北陸二科展

六月二十九日(土)～七月四日(木)
（第7展示室）

二十世紀の初頭から、発足以来二科会は、一流一派式に会の方向を限定することなく、常に制作上の自由と新しい価値の創造を鉄則として歩いてきました。今年の秋は、87回展を東京都美術館で開催いたします。我ら北陸支部員五十余名は、この一年間制作を続けてまいりましたが、本展出品作を中心に、絵画、彫刻百点余りを展示いたします。

多くの方々のご来場をお待ちいたしております。

入場無料

〈連絡先〉金沢市旭町一―一二―一〇
二科会北陸支部長　山岸光代
☎〇七六―二六一―一五八一

次回の展覧会

花鳥画の世界
古九谷・再興九谷

（前田育徳会展示室）
（第2展示室）
六月二十日(木)～七月二十二日(月)

特別陳列　プリズムのきらめきから
～西田洋一郎 絵画空間～

（第4展示室）
六月二十日(木)～七月二十二日(月)

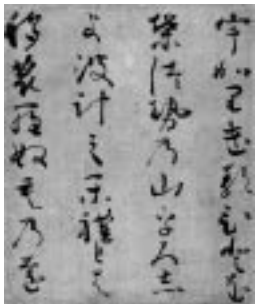
プリズムをテーマにドイツ、フランスなど国際的に活躍する画家西田洋一郎氏の、精緻な世界を紹介します。アクリル画からコンピューターグラフィックスまで、幅広い世界をお楽しみ下さい。

企画展TOPIC

「利家とまつ　加賀百万石物語展」その二

乱世における武将は優れた政治家であると同時に、一人の人間です。決して戦闘ばかりを好んでいたのではありません。「生」に真剣に取り組み、躍動感あふれるその生き方には、今日の我々が大いに参考としなければならないような、基本的な「人間性」を発見することができるのではないでしょうか。この時代には、千利休によって茶道が大成されましたが、やはり真剣に生きた時代が生み出した精神世界の象徴といえましょう。

そのような戦国の武将にとって、茶の湯は単なる娯楽や遊戯ではありませんでした。常に死と隣り合わせの社会に生き、強靱な精神力を要求された彼らにとって、茶の湯が醸し出す「静」の世界は、人間としての自己を取り戻す心の慰めとして、限りなく魅了されるのも、当然の成り行きであった事でしょう。また教養としての魅力、さらには名物茶器への憧れは、自己の権力誇示の側面からも、茶の湯執心の大きな要素であったと思われます。天下統一を果たした織田信長は、入手した名器を、戦功のあった者に褒美として授けるなど、武将を統制する政策として利用したのです。それ故、名物茶器を所持することは武将としての権威を象徴するものとなり、名器所持に拍車をかける結果ともなったのです。



小倉色紙　藤原定家
鎌倉時代　財団法人三井文庫蔵

前田利家の茶の師匠は千利休であり、利休没後は信長の弟である織田有楽が利家晩年の茶の指導者であったといわれています。それでは利家の茶の湯がどのようなものであったのか、その一端を展示作品から紹介いたしましょう。

利家の名前が茶の湯の世界に登場するのは、天正十一年（一五八三）十月五日のことです。大坂の津田宗及邸で催された茶室披きの茶会に、正客として招かれた秀吉の相伴として、織田長益（有楽）とともに参席しています（『宗及自会記』）。宗及は信長・秀吉の茶堂であり、利休と並ぶ達人です。同十五年十月一日、秀吉は天下統一を目前にして、自らの権力を茶の湯を通じて天下に誇示するため、「北野大茶湯」を北野天満宮社頭で催しています。利家も参席し、秀吉の右座の一人として記されています（『北野大茶之湯記』）。この大茶会の様子を**絵巻**（浮田一蕙筆）からうかがうことができます。文禄元年（一五九二）、秀吉の朝鮮出兵にともない利家は肥前名護屋へ布陣しますが、十一月十五日昼、博多の豪商で茶人である神谷宗湛を招いて一客一亭の茶会を催しています。その際に使用された道具について、『宗湛日記』には詳しく記されています。その時に床に掛けられた軸が**「小倉色紙」**です。小倉色紙とは、鎌倉時代初期の著名な歌人藤原定家が、晩年、嵯峨の小倉山荘において、歌人百人の秀歌を選び、色紙に書写したものです。歌は平安時代後期の歌人、源俊頼が詠んだ「うかりけるひとをはつせのやまおろしよはけしかれとはいのらぬものを」です。色紙の寸法や、軸に使用されている裂地についても記されています。慶長二年（一五九七）十一月十三日、利家は秀吉から、北野大茶湯に出陳された**「唐物茄子茶入　銘富士」**を拝領し、台子茶の湯を許されました。これは天下人たる権威付けのセレモニーであり、利家は、この時代の文化の象徴であった茶の湯の世界においても、天下人の仲間入りを果たしたといえます。最後になりましたが、利家と利休の親交を示す**「千利休自筆書状　筑前宛」**は、初めての展覧会出品です。

このように、利家をはじめとして、利長、利常所持の茶の湯道具がお楽しみいただけます。（＊文中のゴシック体は、展覧会出品作品です。）

（高嶋清栄　学芸専門員）

「利家とまつ 加賀百万石物語展～前田家と百万石文化～」
九月十四日（土）～十月二十七日（日）

六月の行事案内

《入場無料・いずれも午後一時三十分から行います》

月日	行事	内容	会場
6／1（土）	土曜講座	古典文学の意匠　源氏物語1　（前田武輝　学芸専門員）	講義室
6／2（日）	月例映画会	ドラクロワ　ロマン主義の逆説Ⅰ　時代に遅れてきた青年（23分）	ホール
6／8（土）	土曜講座	保存のはなし　絵画　（宮　衛　学芸第二課長）	講義室
6／9（日）	CDコンサート	貴志康一　1　交響組曲「日本スケッチ」「日本組曲」より（約40分）	ホール
6／15（土）	土曜講座	漆芸の魅力　7　漆芸と木竹工　（寺尾健一　学芸専門員）	講義室
6／16（日）	月例映画会	ドラクロワ　ロマン主義の逆説Ⅱ　魂の貴族性について（23分）	ホール
6／22（土）	土曜講座	戦国武将と茶の湯　（高嶋清栄　学芸専門員）	講義室
6／23（日）	月例映画会	幻視の画家ボッシュⅠ　異端の北方ルネサンス（23分） 速水御舟　その壮烈果敢な芸術生涯（23分）	ホール
6／29（土）	土曜講座	洋画家列伝12　小磯良平　（二木伸一郎　学芸専門員）	講義室
6／30（日）	CDコンサート	貴志康一　2　交響組曲「仏陀」「7つの日本歌曲」より（約60分）	ホール

※今月の全館休館日は六月十七日（月）～十九日（水）です。

集る

下村正一　大正3年（1914）～

昭和50年　1975
第7回改組日展
縦212.4　横151.9（cm）

下村氏は、これまで花鳥画を中心に、精力的に制作を行ってきました。そのモチーフの多くは、作者が暮らす北陸の豊かな自然の中から見出されています。「ぼくの基本は、得心のいくまで写生をすることです。自然と向かい合って長いこと語り合うのです。こういう風にしたらいいか、これはどうかと長いこと対話をしていると、自然の方から、〝こういう組み方をしたらどうか〟と教えてくれるようになります。自然からのモチーフの発見と、どうしたらそれを表現できるかという発明。この二つが大事です。」と作者が述べるように、心ゆくまで自然と対峙し、対話を重ねることで、生を営むさまざまな鳥や花の特徴をつかみ取り、それらを巧みに構成し画面を形成していくのです。

この作品は、残雪が見える春まだ浅い頃の金沢の郊外を描いたもので、カワラヒワの群が木の枝にとまっている様子を表現しています。視点を低く設定し、前景の大樹を、幹の根元や枝先を断ち切って画面のなかに収めたことで、大きな空間の広がりを暗示させています。また、鳥たちの様々なフォルムは、今まさに動きだそうとするかのようで、春の到来を待ちわびているようでもあります。

金沢市に生まれた下村氏は、京都市立美術工芸学校、京都市立絵画専門学校を卒業。東丘社に入り、堂本印象に師事。日展を中心に作品を発表、金沢美術工芸大学では、ながく後進の指導にもあたりました。

ミュージアムショップ通信

気がつけば、もう雨の季節。しっとりと潤った紫陽花が映える頃です。葉や花に露が連なり、風に散りこぼれる時、その美しさに思わずはっとさせられたりして…。ちょうど展示室は日展金沢展が真っ盛り。心奪われる作品に出会ってみたいですね。

さて、今月のご紹介は『前田育徳会の名宝 百工比照』です。前号に引き続いての五代藩主前田綱紀関係本で、書名だけ見ると、何のことかなと思ってしまいますが、「百工比照」の「百工」とは様々な種類の工芸または工匠のこと、「比照」は比較対照のことを意味します。江戸時代前期から中期にかけての、各種工芸の実物資料や見本、模造品、文書資料などを集めたもので、総点数は二千点以上！。しかもこれは綱紀公の素晴らしいアイデアによるもの。どうやら加賀藩細工所用の参考資料としてまとめられたらしいのです。そして、この当時の加賀藩の美術工芸は、細工所を中心にして、見事な展開をとげています。今では近世工芸技術研究には欠かせない資料となっていて、重要文化財にも指定。秋に開催予定の「利家とまつ 加賀百万石物語展」でも、ほんの少しだけですが公開されますよ。全九十三頁（図版はカラー三十頁、モノクロ二十三頁）で詳しい解説付きです。

『前田育徳会の名宝 百工比照』
（平成5年刊　定価1,500円）

休館日

六月十七日（月）～十九日（水）

石川県立美術館だより
第二二四号　平成十四年六月一日発行
〒九二〇―〇九六三　金沢市出羽町二番一号
TEL　〇七六（二三）七五八〇
FAX　〇七六（二二四）九五五〇